勝山ふれあい市民情報誌

ふるさとルネッサンスだより

2015.10.27
No.27

対談『北谷町小原地区を人々の交流の場所に』
～小原エコプロジェクトの活動から～
東京・関西勝山会から 他

小原集落（平成18年頃）　写真提供：吉田純一氏

「小原ECOプロジェクト」～小原集落の再生～

福井工業大学　吉田純一

◆日本のマチュピチュ…平成十五年春、私が初めて小原集落を訪れた時に目にした光景は今も鮮明に蘇ってくる。山の斜面に這いつくばるように建ち並ぶ家々、段々に積まれた石垣、その裾を走る幾筋もの細い坂道とせせらぎ…。小原集落は豊かな自然に抱かれて静かにたたずんでいた。後に案内した進士五十八先生（東京農大名誉教授）は「日本のマチュピチュ」と絶賛されたほどである。

◆白山麓文化圏の民家…個々の家は小規模ながらも太い通し柱がふんだんに用いられ、枝木が突き出た小石混じりの土壁、二階南面に張り出すウデギなど、家屋形式は加賀白山麓のものに似ている。小原の家は福井県内の民家研究においても貴重だ。

◆崩壊、消滅の危機…当時三十数戸の家があったが、人が住むのはわずか五戸のみ、他はすべて空き家であった。明治期には家数九十余戸、住民も四百人を超していたが、サンパチ豪雪（昭和三十八年）やゴーロク豪雪（昭和五十六年）を機に離村が相次いだという。人が住まなくなると、家は急速に朽ちていく。空き家の多くは軒先が折れたり、土壁が剥がれ落ちたり…。このまま放っておけば、ほどなく倒壊。集落も消滅してしまう。

◆「小原ECOプロジェクト」…「生まれた村がなくなるのは忍びない」という地元民の思いと私の思いが通じ合い、三年後の平成十八年に共同で「小原ECOプロジェクト」を立ち上げた。建築を学ぶ我々は、おもに家の修復と集落の景観整備を担当。十数名の学生が夏休みを利用し、現地に泊まり込んで大工棟梁の手ほどきを受けながら修復作業に当たる。直に建築に触れながらの、まさに建築実践教育の場にもなった。昼食・夕食は地元の方に賄っていただく。

今年でちょうど十年経ったが、この間、七棟の家を修復、古材を使って休憩所も新築した。これらは学生の宿泊所や山菜採り、紅葉狩りなどのイベントにも使われている。

◆小原篝火祭…三年前からは旧村民に呼びかけて小原篝火祭を行っている。十五基の篝火と二百余個の燈籠で集落をライトアップし、仮設の能舞台で加賀宝生流の能舞実演や当地に伝わる伝統芸能を披露、合間を縫って盆踊りも…。参加者たちは思い出話にふけり、お盆の一夜を楽しく過ごしている。また、昨年から作業期間中限定の「古民家DEカフェ」を開業。予想以上の来客に学生たちは戸惑うほどの盛況を得ている。

◆限界集落の再生…人口の減少や高齢化が進み、村落共同体として存続が困難になった、いわゆる限界集落は全国で一万例を越し、大きな社会問題にもなっている。小原もその一つであるが、ここは「豊かな自然と触れ合い、昔ながらの山村生活を体験できる場」という新たな役割を与えられながら生まれ変わろうとしているのである。

＊「小原ECOプロジェクト」は、限界集落の再生の一手法として全国的に高い評価を得、平成二十六度JTB交流大賞を受賞したことを付記しておく。

北谷町小原地区を人々の交流の場所に

～小原エコプロジェクトの活動から～

勝山市北谷町に位置する小原地区は、昔なつかしい雰囲気を漂わせる自然豊かな環境を有すると同時に、冬季の雪深さから自然の厳しさをも有する集落です。現在では住民がお一人だけという集落ですが、近年、年間千人以上の方がこの小原地区を訪れているといいます。小原地区で様々な活動をされ、多くの訪問者を呼んでいる「小原エコプロジェクト」のお二人にお話をうかがいました。

小原エコプロジェクトとは

小原地区の歴史、文化、生活を後世に伝えるべく、地域の再生、自然環境の保護・整備を実施。また、生活体験（炭焼き・養蚕・わら細工）、林業体験や登山・動植物・自然ウォチングなど、各エコツアーを企画し、人々が自然と共に生きた証し、人々が自然とふれあい学べる地域づくりを進めている。

（小原エコプロジェクトホームページより）

【出席者】
小原エコプロジェクト
代　表　國吉　一實
事務局　山内　由季
ふるさとルネッサンス委員会
委　員　丸屋仁志、荒井由泰、笠川小未、森本陽子、阿部光郎、四谷由起夫
（順不同・敬称略）

ふるさとルネッサンス
委員会　委員長
丸屋仁志

丸屋：最初に國吉さんの小原との関わりについて教えてください。

國吉：父親が小原の出身なんですよ。自分は父親を早くに亡くしていたこともあって、小さいときから親戚のおじさんに連れてきてもらいながら、ずっとこの地区に関わってきました。そんな中で、ここの文化とか歴史とか生活方式とかを学ぶというか、自然と身についてきたというか。私自身の住まいは勝山のまちの中なんですが、小さな勝山市という社会の中でも、小原って異空間なんですよね。高校まで勝山市で過ごしていて、勝山の友達に話しても小原のことをわかってもらえない。そして今度大学に行くと、もっと小原と都会のギャップを感じるんですよね。そんな中でUターンして戻ってきて、しばらくは小原に関わることはなかったんです。ところが、小原の住民が六、七人くらいになってきていて、次の世代の人がいないからと、小原生産森林組合の組合長を依頼されたんです。それで小原の地区行政に関わることになって。どうせやるなら自分の好きなようにやらせてくれと。自分のわがままでやりたいことをやらせてもらって、地域の方も協力してくれて、今の小原エコプロジェクトという形で進めるようになりました。やはり住んでいた方にはかなわない部分がありますが、小原は大好きなところです。今はもう住民が一人しかいらっしゃらなくなりました。だから次の段階をどう考えていくかっていうところなんです。このまま残していくか。ボランティアの方を入れながら、新しい風を吹き込むというか、新しい人たちでこの小原をつくりあげていけたらいいなって思うところはあります。

四谷：山内さんはどちらのご出身ですか？

小原エコプロジェクト
代表
國吉一實

山内：三重県です。

荒井：三重県から来られて、勝山市や小原はどのように見えるんですか。

山内：勝山市の第一印象は、キャンプ場のイメージでしたね。子どものころに行ったキャンプ場のまちのイメージがすごくあって。でも実際に住んでみると、人と人が近くて、皆さん気さくで、すごくいいところだなって。小原は、勝山市でももうひとつ濃いところ。勝山市の人も知らない魅力を自分がいっぱい知ることができるのはいいことだなって思っています。

小原エコプロジェクト
事務局
山内由季

丸屋：小原には年間どれくらいの方がいらっしゃるんですか。

山内：住民の方は一人しかいらっしゃらないんですけど、交流に来られる方は延べ人数で年間千二百～千三百人いらっしゃいます。

森本：そんなにいらっしゃるんですか。

山内：その中でプロジェクトに関わる人数が少なくてすごく大変なところはあるんですけど、雪が全くないところから来られる人が、小原の冬を見ると、すごく感動されて、子どものようにはしゃいで、喜んでいただけるんです。冬に来られた人は、今度は夏の景色が見たいとおっしゃるし、夏に来られた方は冬の景色が見てみたいという形で、何度も来ていただけるとすごく嬉しいです。

四谷：雪に感動されるっておっしゃったけど、実際は感動どころではないよね。

國吉：雪のある生活の苦しさをわかっている人はそうなんでしょうね。そこで生活し出したときに、嫌なものだというイメージになってくると思うし。

笠川：生活するのと遊びに来るのでは全然違いますからね。屋根雪を下ろさないと家が潰れますからね。生活がかかっている。命がかかっている。

國吉：雪を知らない人が一、二週間くらい滞在して冬の経験をするっていうのは、おもしろい感じにはなりますよ。

山内：雪下ろしもやったことがない方が、屋根の上に上がれるっていうことが、すごく楽しいみたいです。屋根から飛び降りたりするんですよ。

國吉：勝山のまちなかではできないですよね。小原なら、これだけ雪があるから落ちても大丈夫なんだって。もちろん十分注意をしていますけど。

阿部：冬の間の受け入れもやっているんですか。

國吉：やってます。宿泊して、基本は雪かきをしてもらいます。

荒井：参加希望者はおいでになるんですか。

山内：最初は少なかったですね。豪雪体験というのもなかなかイメージが伝わらなくて。でも参加者が友達を呼んでまた来られるっていうのが増えて。やっぱり口コミが一番。写真を見てもすごいねっていうだけで、どうすごいの

かっていうのを伝えていただくのは、本当に体験していただいた方に伝えていただくのが、一番伝わるんだなって実感してます。

四谷：雪の上をかんじき履いて歩く体験もやってるんですか。

國吉：やってますよ。でも、初心者の方がほとんどなので、それなりの体験というところまでですね。過去にはスカートでかんじきを履く方もいらっしゃいましたよ。

山内：雪の中スーツケースをコロコロ引いてくる方もいらっしゃいましたね。こちらの状況を知らないからそういう感じで来られるんでしょうけど。

笠川：写真を見ましたら、雪の量が半端じゃないですもんね。

荒井：雪囲いはするんですか。

ふるさとルネッサンス
委員会　委員
荒 井 由 泰

國吉：基本的に窓が少ない家です。だから家の中は結構暗いところもあるんです。窓があるところは雪囲いをして、基本的には二階から出入りするんです。妻側に扉が全部ありますから。

笠川：私は三八豪雪を知っているんですけど、あの時の雪の量が小原では毎年降っているっていうことですか。

國吉：私は五六豪雪しか知らないですけど、あのレベルの雪が毎年小原では続いている感じです。

阿部：道路の除雪状況はどうなんですか。

國吉：除雪はきれいですよ。小原道場の近くまで道路はきれいに除雪されます。

荒井：雪が降っても小原まで来られるということですね。

國吉：来られますけど、夕方帰れなくなることもあるんですよ。雪崩が起きて。朝の内に来て帰らないと。

笠川：昼から雪崩が起きるんですか。

國吉：法面の雪が緩むから。どうしようもないときは、市役所に電話して除雪車に上がってきてもらいますけど。

阿部：冬も毎日小原に行かれるんですか。

國吉：週に二、三日は来てますね。ボランティアが来ていない期間に雪が降ると、屋根雪の雪かきをしたりしてます。

笠川：雪はいつ溶けるんですか。

國吉：春の連休前くらいですかね。

森本：勝山のまちなかとは約一ヶ月違うんですね。

國吉：十一月に入ればもう雪ですよ。

荒井：星もきれいですよね。

國吉：夜に林道の奥に行くと本当に満天の星ですよ。

丸屋：川があるから、ホタルはどうですか。

國吉：ヒメボタルがいるんです。福井工業大学の草桶先生が勝山のホタルを調べられていますけど、先生が小原に来られて、小原はヒメボタルの県内一の群生地だと言われたみたいです。七月の第一週から二週にかけて、夜の九時から十時くらいがピークですね。手をたたくと光るんです。音に反応するらしいんです。

荒井：山の川にイワナがいたんですけど、この辺りは魚が貴重なタンパク源だったのでは。

國吉：それはありました。最近は他から来られた方がけっこう釣りをしてますね。

笠川：昔の写真を見たら棚田が写ってましたね。

ふるさとルネッサンス
委員会　委員
笠 川 小 末

國吉：今もありますよ。

笠川：水田だったんですか。

國吉：水田です。部分的に畑にしていたところもあると思いますけど。明治の終わりには九十軒五百人も住人がいたんですから、自給自足できるだけのものはあったんでしょうね。

笠川：ヒエやアワを食べていたのかなって思っていましたけど、写真を見たら棚田が多かったから、結構お米も穫れていたのかなって。

國吉：昔の文献を見ていると、あれだけ水田はありましたけど、五百人が食べられる量のお米はなかったみたいです。

荒井：生計はどう立てていたんでしょうね。

國吉：木挽きとか養蚕とか、現金交換作物的なものですね。私も養蚕をやろうかなと考えてます。道具もありますし。

森本：小原の集落の中は道沿いの草をちゃんと刈ってありますよね。村全体を維持するのってすごく大変なことなんだろうなって思います。自分の家も守らないといけないのに。

國吉：基本的に、村の方や村を出て行かれた方が、いついつこういう行事があるからっていうと、草刈りとか自発的にやってくれるんです。例えばツアーをやるときに、自分ならこういうときに応援できるよっていうことで草刈りをやってくれるんですよ。

森本：その考え方いいですね。自分にできることを自分の都合でするというスタンスがいいなと思う。

國吉：当初もツアーをやる時には、おばちゃんたちが手伝ってくれたんですけど、十年もやっていると、皆さんの年齢が八十歳過ぎて無理だという方も出てきて。そういう風に関わる人は少なくなってきてるんですけど、代わりに、こういうことはできるから応援するよっていう方もいらっしゃいます。こちらからお願いすることもありますけど。

荒井：食事は、小原の伝統料理を用意するんですか。

山内：ツアーに関しては、おばちゃんたちに作ってもらうこともあります。小原まで上がってこられないけれど、作ってもらったものを小原に持ってきて食べてもらうという形でやることもあります。やっぱり昔からの味というものを体験してもらいたい。

國吉：自炊してもらったりもしますからね。

阿部：そういう活動をされているっていうことを私たちは知りませんでしたね。

ふるさとルネッサンス
委員会　委員
阿 部 光 郎

國吉：当初から勝山市内ではなく、大手の旅行会社さんを通じて市外に向けて参加者を募集してます。勝山市内で募集しても来ないですからね。昨年はＪＴＢの交流文化賞をいただきましたし、そういう関係で大手旅行会社とも話ができるし、福井県観光連盟さんもおもしろいツアーをやってくださるし。

荒井：灯台下暗しで、市内でこんなにいろいろやっているのに市民は知らないんですよね。

國吉：エコミュージアムでいろいろやられてますが、勝山市の中でしか募集してないから、いつも参加者の顔ぶれは一緒なんですよね。市の広報誌で募集しても、市内の人たちにしか知らせられないし、もっと他へ募集する形態をとるとか東京や関西の勝山会の方に情報を出していけば、勝山の魅力が外に広がると思いますよ。

森本：ヒントになる言葉がいろいろ出てきますね。

國吉：もっと他の団体さんも外に広げる活動をしていただくといいですね。リスクはあるかもしれないけど。

四谷：小原エコプロジェクトは何人くらいいるんですか。

國吉：名簿上は五十人くらい。実働的には十人ちょっとしかいません。

笠川：ブータンが世界からいいところだと言われてますよね。小原もブータンのような感じの魅力というか、同じような魅力があると思う。小原のようなところが見直されているっていうかね、都会で疲れてる人には魅力なんでしょうね。

荒井：癒やしの空間なんでしょうね。

森本：その異空間がいいんですよね。現実からちょっと離れてるところが。

笠川：あまり携帯電話も使えないようなところがね。

山内：二、三年前までは携帯電話は全く使えなかったんですよ。

國吉：テレビも写らないですよ。

山内：谷間すぎて電波が届かないんです。

國吉：最近でこそBSがあるのでいいんですけど、新聞配達も来ないですし。

山内：だから、みんなが喋るんですよね。コミュニケーションをとるんです。だまって携帯電話を見てるんじゃなくて、知らない人と一緒に喋るんです。

國吉：福井工業大学の学生さんも、何もないから逆に話すって言ってましたね。

丸屋：福井工業大学の学生さんはどのような関わりがあったんですか。

國吉：平成十五年に福井工業大学の吉田純一先生が勝山市から委託を受けて勝山市内の家屋調査に入られたんですよね。小原も対象になって、その縁で吉田先生と知り合って。平成十八年の豪雪で民家が結構つぶれちゃって、自分たちがちょうど民家を活用して何かしたいって言っていた時だったので、吉田先生に相談しに行ったんです。民家を直す方法がないかって。一番最初に言われたのが、お金があるのかって。お金はなかったんです。そしたら、一年間学生さんに協力してもらおうっていうことになったんです。やり始めた最初の一週間は家の中の道具の片付けでしたね。その家は、住人の方が生活の道具をそのまま残して施設に行かれてしまったので、家具などがそのまま残ってたんですよ。それを一週間かけて学生さんが片付けて、それから修復に入って、なんとか一ヶ月くらいで修復しましたね。それで、その体験の教育的効果がすごく大きかったんですね。十年前のことですけど、今時の大学生って言われる中で、挨拶はできない、集団生活にはまったく馴染めないっていうゼミの学生さんだったのに、一ヶ月半のここでの生活で、社会的な部分というか、人との協調とか、もちろん住民と挨拶するとか、そんな基本的なことで人間的な成長が見られたんです。建築的な勉強もあるけど、教育的な視点から、これからもやろうかっていうことで、ここまでやってきました。

荒井：継続できていることがすごいよね。それだけ意義があるということだし、若い人が関わっているっていうことはいいですよね。

森本：小原でたくさんの人に思い出づくりをしてもらって、未来へ引き継いでもらいたいですよね。

ふるさとルネッサンス
委員会　委員
森本陽子

荒井：集落は守ってもらって、たくさんの人に来てもらうと元気が出てくるんじゃないかと思う。活動してくださる人がいると、小原みたいな集落への理解が深まる。

森本：國吉さんのような人がいないと。

荒井：また次の若い人につながっていくと、持続可能になってくるんだと思います。

森本：ここを見てると、うちの地区の行く末を見ているようで。それを思うとこのようにされているのがすごいなと思う。うちの地区もあと二十年経ったらどれだけ残ってるのかなと思う。どんどん人が減ってるんですよね。

國吉：そのために早めに手を打った方がいいですよ。

荒井：小原が残っている理由は何だと考えますか。

國吉：住民の方や村を出られた方はずっと危機を感じていて、どうしようかって悩み始めました。そこが一番大きい転換期かなと思います。なるようになるとか、他人事のように考えていると、廃村になってしまうでしょう。そうじゃなくて、危機感や、何とかしたいっていう思いがありましたよね。

荒井：ツアーを受け入れることも含めて、人に来てもらう仕掛けを作るっていうのも一つの残り方ですよね。

國吉：もっと外部の方にこういう集落の存在を知ってもらいたいですね。

森本：國吉さんは、守っていくっていう形をどういう風につくるかっていうのをいろいろと考えてらっしゃいますけど、いずれここで住むことを考えていますか。

國吉：そこは考えていないです。人がいなくても集落が存続する方法があるのではないかって、そこをずっと模索しています。だから外部とのいろいろな交流でのコミュニティがここで成り立って、それをコーディネートできればいいなって。そういう集落の維持、文化や伝統の守り方もあると思う。勝山市のまちの中は、定住促進を進めていくとか、そういうのをやるべきだろうと思いますけど、外から来る方にもっと柔軟に対応できればいいかなと思います。

阿部：小原出身の方の所在は把握されてるんですか。

國吉：全ては把握していないですね。世代が変わりすぎてしまって、私の上の世代なら所在はわかってるけど、下の世代の人たちはそこまで関心がないし、小原に住んだ経験もないし。

四谷：都会に出ている人が多いんですか。

ふるさとルネッサンス
委員会　委員
四谷由起夫

國吉：勝山市のまちなかや、福井市に出ていますね。

阿部：出身の方が集まって何かするという機会はあるんですか。

國吉：集まる機会をつくってあげるのも一つの手かなと思います。

阿部：出身者の方がどこにいるかわかると声が掛けられますよね。そうしたら年に一度くらい集まれる。

荒井：とにかく情報発信できれば、出身者の方が集まれる機会があるかもしれませんね。

関西勝山会

関西勝山会のご案内

第89回関西勝山会総会・懇親会を下記の日程で開催いたします。

例年、勝山市より多数のご来賓を迎え、ふるさと勝山の近況等を話していただき、また会員相互の情報交換や久しぶりの再会を懐かしむなどの親睦が図られています。

勝山市出身で関西地域に在住されている方は、是非一度ご参加下さい。事務局へご連絡いただければ、案内状を送付致します。

第89回 関西勝山会総会・懇親会

日　時　平成27年11月29日(日)
11:00～14:30　(受付10時より)

場　所　太閤園
(大阪市都島区網島町9-10 Tel.06-6356-1110)

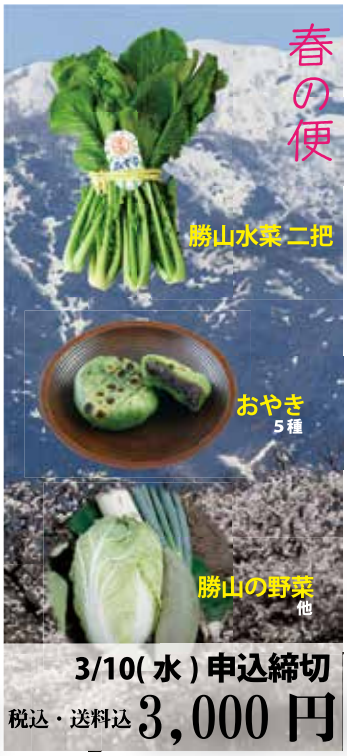
事務局　〒542-0081
大阪市中央区南船場1-7-8-403号
髙井会計事務所内
関西勝山会事務局　髙　井　征　夫
TEL.06-6261-2006
FAX.06-6261-2008

東京勝山会

東京勝山会の近況

東京勝山会　事務局　出　口　忠　夫

第62回の勝山会総会・懇親会を本年10月11日に開催しました。創業時（昭和９年）の内装そのままに、高い天井とモザイク壁画に囲まれ古色蒼然たる雰囲気のライオン銀座大ホールで行われ、長い歴史を誇る東京勝山会に相応しい会場でした。３連休の中日の開催でしたが53名の参加を得、盛大な会となりました。地元勝山から、山岸市長は「人口減少を食い止め、小さくともキラリと光るまちの創生」、帰山市議会議長は「来年５月の落成を記念して新体育館から“ＮＨＫのど自慢”が全国放送される」、前田東京事務所長は「山口茜さんの最近の活躍」、福井県庁の田畔課長補佐は「ふるさと納税」など来賓（９名）の方々から市の現況報告があり、改めてふるさと支援の重要性を認識しました。そして荒井商工会議所会頭の乾杯で懇親が始まり、１年ぶりの元気な再会を喜ぶ声、田舎の思い出話しに花を咲かせる席、東京勝山会の定例部会活動「ゴルフコンペ」や「歩こう会」の話題など、市と商工会議所からいただいた一本義の名酒があっという間になくなるほど、会場は大いに盛り上がりました。会場では市長肝いりの勝山市公式カレンダーが紹介され、たくさん販売できたと伺っています。最後に出席者全員で記念撮影し、来年の再会を約して散会しました。



NPO法人市民活動ネットワークかっちゃまHUB「勝山組曲」係
〒911-0811 福井県勝山市片瀬町1丁目402　TEL:0779-87-1011　FAX:0779-87-1022
kumikyoku@kacchama-hub.com

「勝山組曲」の商品はインターネットでも購入できます
公式ネットショップはパソコンから http://kkumikyoku.shopro.jp/
スマートフォンからは右のQRコードからアクセスできます

（写真はイメージです）
商品は、天候などにより変更になる場合があります。

「かつやま」を「食」で奏でる
勝山組曲
KATSUYAMA SUITE
勝山組曲　検索
※勝山市から委託を受けて実施しています。

ふるさと納税制度で、あなたもぜひ勝山市に応援を!!

このふるさと納税制度は、ふるさとを応援したいという方々の想いを実現するため、地方公共団体に対する寄付金の額に応じ、所得税と個人住民税が軽減されるものです。また、寄付先は、出身地に限らず自由に選べ、好きな地域を応援できます。

税制上の優遇制度

- **勝山市へ寄付された場合、寄付をした金額に応じて個人住民税と所得税の控除を受けることができます。**
  （控除額については、お住まいの市区町村にお問い合わせください。）
- **控除を受けるには、確定申告や住民税の申告が必要です。**
  ※一定の条件を満たした場合に、簡素な手続きで確定申告が原則不要になる「ふるさと納税ワンストップ特例制度」が始まりました。
  〈ワンストップ特例制度を利用できる方〉
  1．勤務先で年末調整される給与所得者等で、確定申告を行わない方
  2．ふるさと納税をされる自治体数が５つまでの方
  （1、2両方の条件を満たした方に限り利用できます。）
  ※「ふるさと納税ワンストップ特例制度」を利用する場合は、後日お送りする「寄付金税額控除に係る申告特例申請書」を勝山市に提出いただきますようお願いします。

ふるさと納税者への特産品送付事業を行っています

いつも勝山市に対し、ふるさと納税による応援をいただきありがとうございます。ふるさと納税による御寄付をいただいた場合には、金額に応じて勝山市の食の特産品を詰め合わせた『勝山組曲』をお送りしています。

※『勝山組曲』の送付はその時の旬の特産物を詰め合わせてお送りするため、ふるさと納税をいただいてからお送りするまでお時間がかかることがございます。何卒御了承くださいますようお願いします。

寄付のお申込方法

勝山市へご寄付をいただける方は、下記連絡先（勝山市役所未来創造課）までご連絡をお願いいたします。折り返し郵便振替用紙を送付させていただきますので必要事項をご記入の上、お近くの郵便局よりお振込みください。
詳しくは、http://www.city.katsuyama.fukui.jp/ の、**「ふるさと納税」**をご覧ください。

ふるさとルネッサンス委員

委員長	丸屋仁志	委員	森本陽子	委員	荒尾るみ子		
委員	荒井由泰	〃	阿部光郎				
〃	笠川小末	〃	四谷由起夫				

（順不同・敬称略）

発行／ふるさとルネッサンス委員会　（事務局）勝山市企画財政部未来創造課
〒911-8501　福井県勝山市元町1丁目1-1　TEL.0779-88-1115　FAX.0779-88-1119
e-mail:rune@city.katsuyama.lg.jp　勝山市ホームページ:http://www.city.katsuyama.fukui.jp